2

江戸町中学校の二年三組では、国語の授業で、「学級の皆に読んでもらいたい小説」について、その魅力をポスターにまとめ、発表する学習を行っています。Aさんのグループは、芥川龍之介の「魔術」という作品を選び、グループで協議しながら、その魅力をまとめています。Aさんのグループが選んだ次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある雨の夜、「私」は、名高い魔術師ハッサン・カンに学んだ、ミスラ君の洋館を訪ねた。大森（現在の東京都大田区）にあるその洋館で「私」は、ミスラ君が披露する不思議な魔術を目の前にして、声も出ないほど驚くのだった。

「いや、かねがね評判はうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほど不思議なものだろうとは、実際、思いもよりませんでした。ところで、私のような人間にも、使って使えないことのないというのは、御冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作なく使えます。ただ――」と言いかけてミスラ君はじっと私の顔を眺めながら、いつになく真面目な①口調になって、「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず欲を捨てることです。あなたにはそれができますか。」

「できるつもりです。」

私はこう答えましたが、なんとなく不安な気もしたので、すぐにまた後から言葉を添えました。

「魔術さえ教えていただければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな目つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのはぶしつけだとでも思ったのでしょう。やがて大様にうなずきながら、

「では教えてあげましょう。が、いくら造作なく使えると言っても、習うのには暇もかかりますから、今夜は私のところへお泊まりなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えてもらううれしさに、何度もミスラ君へお礼を言いました。が、ミスラ君はそんなことに頓着する気色もなく、静かに椅子から立ち上がると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊マリニナルカラ、寝床ノ仕度ヲシテオイテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を②アびた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじっと見上げました。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

私がミスラ君に魔術を教わってから、ひと月ばかりたった後のことです。これもやはりざあざあ雨の降る晩でしたが、私は銀座のある倶楽部の一室で、五六人の友人と、暖炉の前へ陣取りながら、気軽な雑談にふけっていました。

「私」は、友人の求めに応じて、暖炉の中の燃える石炭を拾い上げ、それを目の前で金貨に変える魔術を披露した。

「何しろたいした魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これじゃ一週間とたたないうちに、岩崎や三井にも負けないような金満家になってしまうだろう。」などと、口々に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子によりかかったまま、悠然と葉巻の煙を吐いて、

「いや、僕の魔術というやつは、一旦欲心を起こしたら、二度と使うことができないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまった上は、すぐにまた元の暖炉の中へ放りこんでしまおうと思っている。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合わせたように、反対し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまうのは、もったいない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖炉に放りこむと、剛情に友人たちと争いました。すると、その友人たちの中でも、一番狡猾だという評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたくないと言う。それじゃいつまでたったところで、議論が干ないのは当たり前だろう。そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、君が僕たちとカルタをするのだ。そうしてもし君が勝ったなら、石炭にするとも何にするとも、自由に君が始末するがいい。が、もし僕たちが勝ったなら、金貨のまま僕たちへ渡したまえ。そうすればお互いの申し分も立って、至極満足だろうじゃないか。」

それでも私はまだ首を振って、③＿＿容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。ところがその友人は、いよいよあざけるような笑みを浮かべながら、私とテーブルの上の金貨とをずるそうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちとカルタをしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思うからだろう。それなら魔術を使うために、欲心を捨てたとか何とかいう、せっかくの君の決心も怪しくなってくる訳じゃないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのじゃない。」

「それならカルタをやりたまえな。」

何度もこういう押し問答を繰り返した後で、とうとう私はその友人の言葉どおり、テーブルの上の金貨を元手に、どうしてもカルタを闘わなければならない羽目に立ち至りました。もちろん友人たちは皆大喜びで、すぐにトランプを一組取り寄せると、部屋の片隅にあるカルタ机を囲みながら、まだためらいがちな私を早く早くとせき立てるのです。

ですから私も仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、嫌々カルタをしていました。が、どういうものか、その夜に④＿＿カギって、ふだんは格別カルタ上手でもない私が、うそのようにどんどん勝つのです。するとまた妙なもので、はじめは気のりもしなかったのが、だんだん面白くなり始めて、ものの十分とたたないうちに、いつか私は一切を忘れて、熱心にカルタを引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らずまき上げるつもりで、わざわざカルタを始めたのですから、こうなると皆あせりにあせって、ほとんど血相さえ変わるかと思うほど、夢中になって勝負を争い出しま

した。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高だけ、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、

〈〜中略〜〉私の前に、札をつきつけながら、

「さあ、引きたまえ。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作も、馬も、自動車も、一つ残らず賭けてしまう。その代わり君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引きたまえ。」

私はこの刹那に欲が出ました。テーブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、せっかく私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向こうの全財産を一度に手へ入れることができるのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐があるのでしょう。そう思うと私は矢も盾もたまらなくなって、そっと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引きたまえ。」

「九。」

「王様。」

私は勝ち誇った声を挙げながら、まっ青になった相手の眼の前へ、引き当てた札を出して見ました。すると不思議にもそのカルタの王様が、まるで魂がはいったように、冠をかぶった頭をもたげて、ひょいと札の外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮かべて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰リニナルソウダカラ、寝床ノ仕度ハシナクテモイイヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨脚までが、急にまたあの大森の竹やぶにしぶくような、寂しいざんざ降りの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見まわすと、私はまだうす暗い石油ランプの光をあびながら、まるであのカルタの王様のような微笑を浮かべているミスラ君と向かい合って座っていたのです。

私が指の間に挟んだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっているところを見ても、私がひと月ばかりたったと思ったのは、ほんの二三分の間に見た、夢だったのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だということは、私自身にもミスラ君にも、明らかになってしまったのです。私は恥ずかしそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業ができていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな目つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテーブル掛けの上に肘をついて、静かにこう私をたしなめました。

（芥川龍之介「魔術」による）

（注）

・**造作なく**…簡単に。手間がかからず。

・**頓着**…気にすること。

・**倶楽部**…明治、大正期の社交場をこう呼んだ。

・**岩崎や三井**…政治、経済に大きな影響（えいきょう）を与（あた）えた実業家。

・**狡猾**…悪がしこいこと。

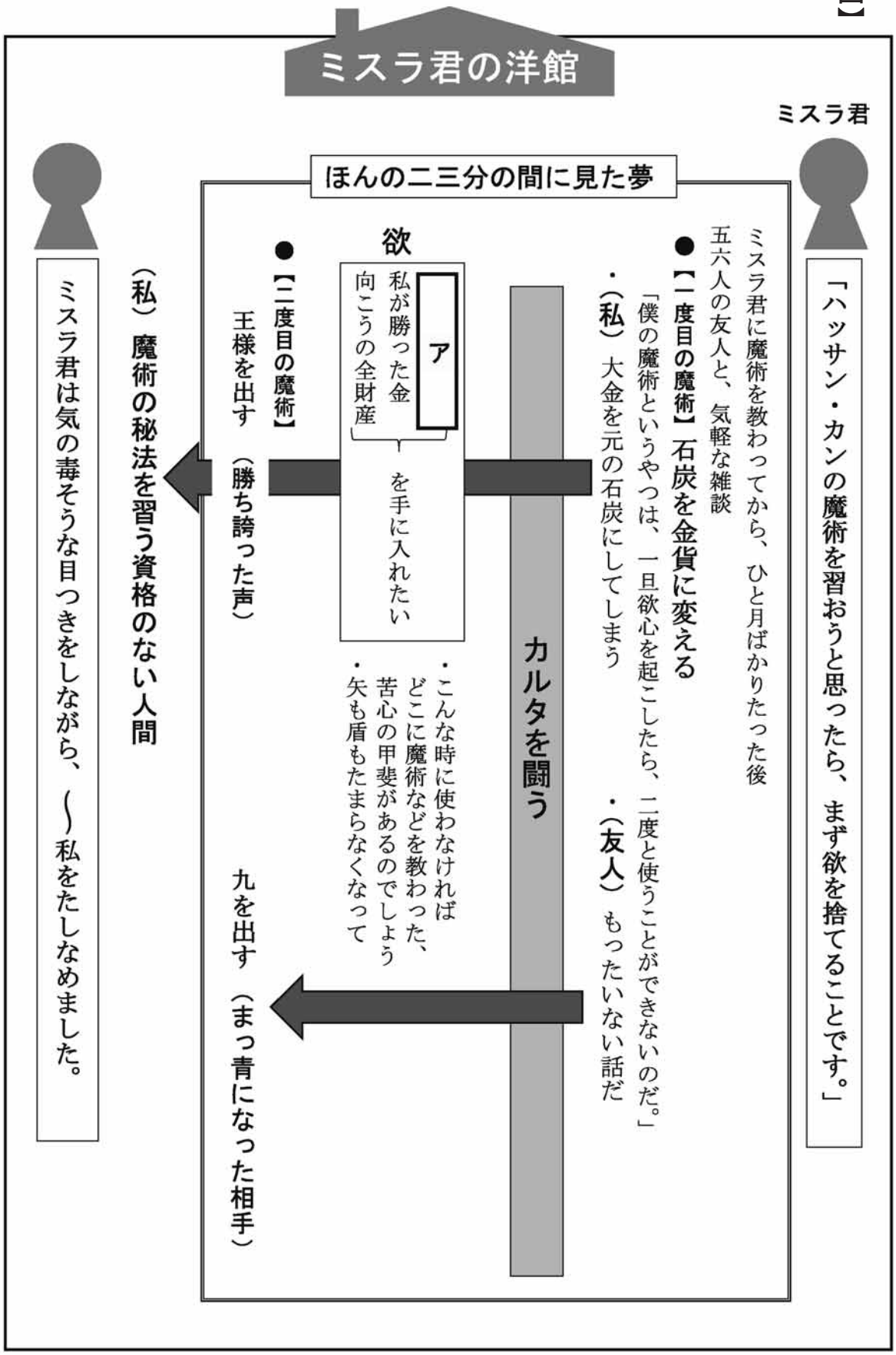
・**議論が干ない**…議論が終わらない。

・**カルタ**…ここではトランプのゲームのこと。

・**刹那**…きわめて短い時間。

一　Aさんのグループでは、「魔術」の内容を、次のような【図】にまとめました。この【図】について、あとの問いに答えなさい。

【図】



(1) Aさんのグループでは、文章の内容をまとめた【図】を基に、話し合いを行っています。次の【話し合いの様子】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【話し合いの様子】

Aさん　二度目の魔術を使おうと思ったのはなぜかな。

Bさん　友人たちの言葉を聞いて、欲が出てきたからだと思うよ。

Cさん　このときの「私」は、どんな気持ちだったのだろうね。

Aさん　「矢も盾もたまらず」は辞書で調べてみたら、「矢に攻められても盾で防ごうとしても止められないことから、［イ］」とあったよ。

Bさん　それほど「私」の欲が大きくなっていたんだね。

Cさん　話の最後で、「私は恥ずかしそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした」とあるけれど、なぜそれほど恥ずかしかったのかな。

Aさん　ハッサン・カンの魔術の秘法を習う［ウ］（二字）のない人間だということが明らかになったからだと思うよ。

Cさん　「ミスラ君」は「気の毒そうな目つき」で「私」を見ていたね。この時、ミスラ君は、どんな気持ちだったのだろう。

(あ) 「欲」とありますが、このとき「私」が手に入れたかったものは何ですか。【図】の［ア］欄にあてはまるよう「魔術」本文から、七字で抜き出しなさい。

(い) 「矢も盾もたまらず」について、【話し合いの様子】の［イ］に入れるのに最も適切な言葉を、次の1から3までの中から一つ選びなさい。

1　優しい感情を押し殺している様子　　2　自分の気持ちが抑えられない様子　　3　失敗で投げやりになっている様子

(う) 【話し合いの様子】の［ウ］に入る語句を、【図】の中から二字で抜き出しなさい。

（え）「この時、ミスラ君は、どんな気持ちだったのだろう。」とありますが、このときのミスラ君の心情として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　「私」が友人たちの前で、恥をかかされたことに心を痛めている。
2　魔術をうまく習得できなかった「私」を軽くみてあなどっている。
3　欲を捨てようとしても捨てきれない「私」をあわれに思っている。
4　カルタに負けて全財産を失った「私」をかわいそうに感じている。

(2)　Aさんのグループでは、「魔術」という作品の魅力をまとめるために、「私」の人物像と、文章の特徴についてまとめることにしました。次の（あ）・（い）に答えなさい。

（あ）「私」の人物像について、最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　場の状況が変化しても、自分の信念をつらぬく人物
2　常に礼儀を忘れず、相手を思いやる行動をとる人物
3　様々な障害を乗り越えて、正しい判断をくだす人物
4　好奇心が強く、相手の要望にこたえようとする人物

（い）「魔術」という文章の特徴として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　会話文や効果的な比喩表現が多く用いられており、登場人物の様子が生き生きと伝わってくる。
2　色彩や音についてはたとえを用いて表現することで、明るい様子を想像させようとしている。
3　二人の人物が語り手として入れ替わりながら話が進んでいて、複雑な構成になっている。
4　文章全体に大きな場面の変化はなく、登場人物の気持ちの変化を中心に構成されている。

二　Aさんのグループでは、「魔術」という文章の中から、日常生活で使ってほしい漢字をいくつか挙げてみました。**文章中**の――線部①～④のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、ていねいに書きなさい。

①　口調　　②　アびた　　③　容易　　④　カギって